

石川県白山自然保護センター編集

はくさん

第15巻 第2号



白峰村の^{びやこだん}百合谷珪化直立樹幹

珪化木自体はそれほどめずらしいものではありませんが、多くは流木が土砂に埋まってできたものです。この写真のように立木が土砂に埋まりそのまま珪化したものは全国的にみても多くはありません。その場所に生育していた（原地性）という意味で、学術的に貴重なものです。この珪化木は高さが2m、長径が約60cmあり、これを含んでいる地層は中生代の手取層群で、最近恐竜の化石の発見で注目を集めている桑島の『化石壁』の地層と同じものです。昭和59年3月24日に白峰村の天然記念物に指定され、今年の春には県の天然記念物に指定されています。

蛇谷のクモ

東勝公



アシナガサラグモ♀

白山山系の数ある溪谷の中でも、蛇谷溪谷はブナ・ミズナラなどの原生林が茂り、その中に日本を代表する大型哺乳類や鳥類、それに昆虫類が数多く生息している。

このような環境から、昆虫を捕食するクモ類も必然的に多いことは容易に想像できる。現在までに、「白山のクモ」として、徳本が58種（内2種はその後八木沼の研究で同一種とされたので実際は57種）その後富樫が5種を加え62種が白山地域から記録されている。このうち、三又、中宮、岩間など蛇谷周辺から記録されたクモは徳本の9種にすぎず、これはクモ類に対する関心の薄さと調査の不充分さによると考えられる。その種類および生態を解明し、生活環境の破壊によって絶滅するおそれのあるクモも他の植物や動物と同様保護することが必要と思われるので、今までに調査したものの中から比較的に目につきやすい種類をここに紹介する。

A 造網性(占座性)のクモ

1. カタハリウズグモ

体長4～6mm、汚れた黄褐色で、山地の日かげに直線状などのかくれ帯をつけた水平円網をはっている。このクモは篩板類しぼばんに属し通常の糸いぼの他、篩板とよばれる板のような糸を出す器官をもっている。

2. オオヒメグモ

体長6～8mm、腹部が丸く黒・白・褐色などが細かく入り組んだ模様のクモで、全国どこでも家屋内外の薄暗い所に立体的な不規則網をはっている。このクモの糸は粘り気があまりないけれども、地面などに接した部分は粘り気が強くそれにかかった獲物を吊り上げるといった変わった方法をとることで知られている。蛇谷では白山自然保護センター中宮展示館内外の壁の他、野猿広場へ行く途中のトンネル出入り口の岩肌にも生息していて、初秋になるとトンネル中央部へ移動すると思われる。7月頃直径1cmくらいの薄茶褐色の卵囊うご2～4個を網に吊り下げているのがみられる。

3. ユノハマヒメグモ

体長4～5mm、前種に似た色彩と形態をしているが家屋内外には生息せず湿った岩場やトンネル出入りに前種と混生している。このクモは前種と共に好暗性のクモとして洞窟グモに加えられている。

4. カグヤヒメグモ

体長5～7mm、オオヒメグモとよく似ているクモで木の枝などに籠状の不規則網をはっている。本種も野猿広場への道で見られるが密度は高くない。

5. アシナガサラグモ

体長4～6mm、小型のクモで腹背（腹部の背中側）に灰白色の中央斑、両側に2対の黒斑があり、その名の示すように歩脚は、体長の3倍もあり草間にドーム状の網をはっている。蛇谷には本種が非常に多く、9月初旬頃には雌の網を訪れている雄を見ることができ

6. イシザワオニグモ

体長20mmくらい、大型の美しいクモ。腹背は明るい褐色または赤みがかった褐色でその中に白色の斑紋があり、樹間に大きな垂直円網をはったり、また日中は草むらにひそんでいることもある。蛇谷では個体数はあまり多くはない。

7. ムツボシオニグモ

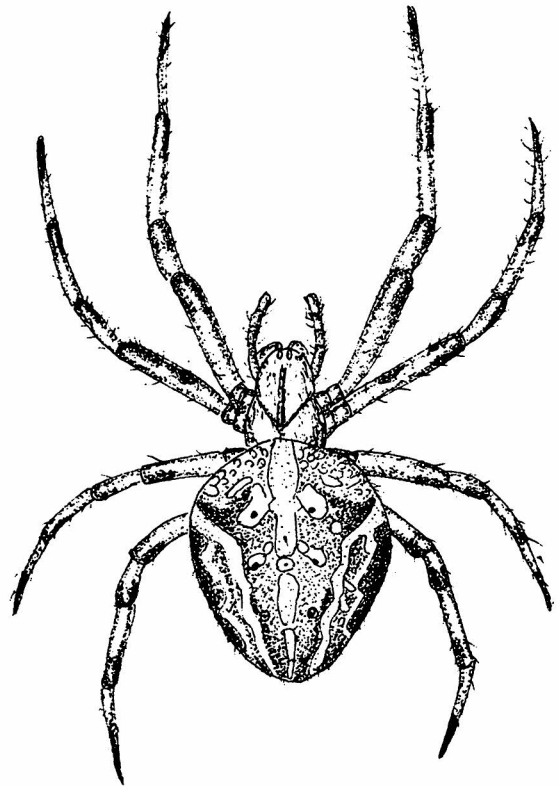
体長6～7mm、小型の美しいクモ。腹背は黄白色または薄緑色で左右対称の6個の黒色斑点がある（中には8個の斑点を有する個体がありこれをハナオニグモとして別種にしていたが最近同種とされた）。広葉樹などの葉に6～10cmの水平円網をはっており野猿広場付近で見られる。

8. ヤマシロオニグモ

体長雄8～10mm、雌12～15mm、背甲（胸部の背中側）は赤褐色、腹背は灰褐色の地に褐色の斑紋があり腹面後方に1対の白斑がある。ただこのクモは個体により色彩の変異が多く、中宮展示館付近で観察したのは、全体が赤褐色で腹背後部に大きな黒斑があって他の斑紋の消失しているアトロ型とよばれるものだった。7月頃、木や草の間に30～40cmの垂直円網をはっているが、これもあまり数は多くない。

9. カラフトオニグモ

体長雌7～9mm、背甲は黄褐色、腹背は褐色で中央に白斑があり後方の葉状斑ははっきりしているが、本種も前種同様個体によって斑紋の変異が多くいろいろ



イシザワオニグモ

の型がある。鶴来から一里野、蛇谷と生息範囲が広く6月頃から草間に垂直円網をはっているのがみられる。

10. メガネドヨウグモ

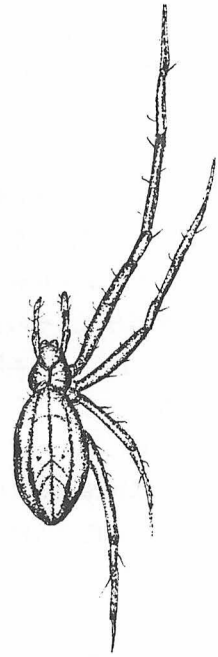
体長9~11mm、腹背は灰白色の地に茶褐色の斑紋がある。本種の特徴は名の示すように背甲に黒褐色のメガネ状の斑紋があることで、容易に他種と区別でき、溪流の縁の樹枝などに水平または斜めの円網をはっている。本種も一里野から蛇谷にかけて非常に多くみられる。

11. オオシロカネグモ

体長雌13~15mm、雄8~10mm、腹背は銀色地に少し金色を帯びその中を3本の黒条が走る美しいクモ。この黒条は、刺激を与えると太くなるのでよく知られている。前種同様溪流の縁などの樹間に水平円網をはり、数は比較的多い。

12. コクサグモ

体長10~12mm、比較的大型のクモで全体が黒っぽい黄褐色で腹背には細い黄色の斑紋が矢羽根状にならんでいる。本種も非常に密度が高く特に中宮展示館前の河原の草間に棚網をはっているのが多く見られる。網の奥には管状の住居があり、驚くとその中に逃げこみなかなか出てこない。



オオシロカネグモ

以上の他、徳本はカニヒメグモ、チビアカサラグモ、オニグモ、ヤマヤチグモなどを記録しており、また著者もムナボシヒメグモ、チビアカサラグモ、ヤマヤチグモなどを観察している。

B 非造網性(はいかい性)のクモ

1. コハナグモ

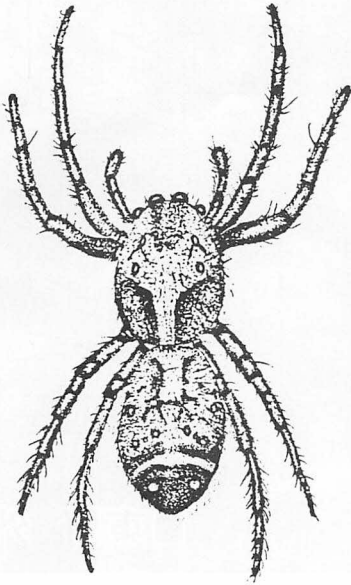
体長4~6mm、背甲および歩脚は薄緑色、腹背は黄白色で茶褐色の斑紋があるカニグモ科の種類。他のハナグモ同様花の蔭などで獲物を待ち、蛇谷ではあまり多くない。

2. フノジクモ

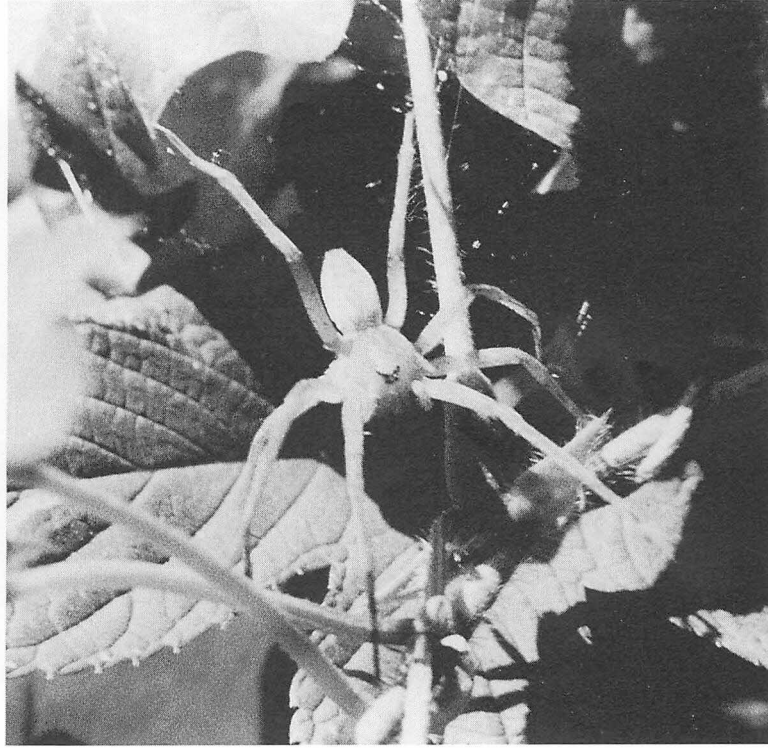
体長4~6mm、カニグモとは思えない真黒なクモで、腹背は白地に黒で”不”の字を書いたような斑紋があるところから名付けられた。草の間で獲物を探しているが、本種もあまり多くない。

3. マダラスジハエトリ

体長8~10mm、背甲は黄褐色、腹背は灰褐色の地に黒斑や特に後部の白斑が目だつ。本種は各地に分布しているがその数は極めて少なく、記録された例はあまりない。勿論、石川県でも記録されたことはなく、これは成体の出現する時期が他種に比べてずれているた



マダラスジハエトリ♀



アズマキシダグモ♀

めと思われる。即ち成体は晩秋から初冬にかけて山地の木の幹などをはいかいし、樹皮下に糸で袋（封筒状）の住居をつくりその中で越冬する。一里野の杉林で12月に観察したことがあり蛇谷にも生息していると考えられる。

4. アズマキシダグモ

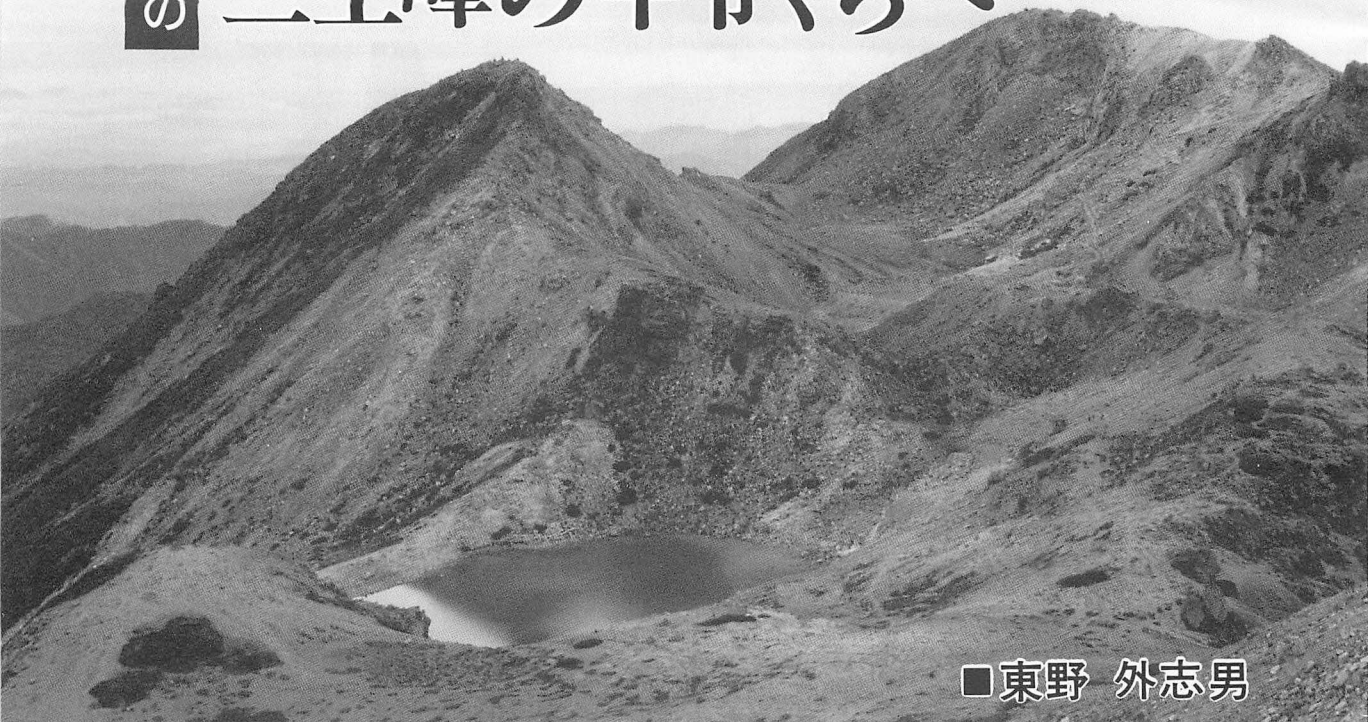
体長8～12mm、色彩斑紋の変異が著しく現在4型に分けられている。出現期は6～8月とされているが1年中みられ、3月下旬ブナオ山観察舎の前で雪の上を歩いている2頭を観察したことがある。いずれもアズマ型とよばれるもので、腹背が褐色で両縁は幅広いジグザクの濃褐色斑があった。鶴来地方にはキスジ型とよばれる背甲および腹背が赤褐色で黄色の線が太く走っている種類が生息しており、地域によって異なるものと思われる。

5. ウヅキコモリグモ

体長7～10mm、全体が黒く背甲および腹背が暗褐色のクモで地上や葉上におり、7月上旬卵囊を尻につけて雌が走り廻っている。ふ化した子グモは親の背中にこぼれんばかりにしがついているのがみられ、数は非常に多い。

この他、徳本はウススジハエトリ、トラフカニグモなどを記録しており調査によってもっと増えることと思われる。終りに、一部同定を賜った東亜クモ学会八木沼健夫博士ならびに文献をご恵与下された徳本洋（金沢中央高校）、富樫一次（石川県農業短大）両先生に感謝いたします。
（石川県自然解説員）

三主峰の年令くらべ



■東野 外志男

御前峰（右）と剣ヶ峰（左）・手前の池は翠ヶ池（大汝峰より撮影）

白山の山頂部は御前峰（2,702m）・剣ヶ峰（2,660m）・大汝峰（2,684m）の三主峰から成り立っています。これらの峰は全て白山火山の噴出物で構成されていますが、その姿は三者三様です。大汝峰は円く穏やかで、女性的です。一方、剣ヶ峰は険しく尖っており、男性的な様相を見せます。三主峰のなかで最も標高の高い御前峰は、御宝庫のほうへ細長くのびている稜線が特徴です。このように変化に富む三つの峰がいつごろ、どのようにしてできたのか、地形や地質を調べている方でなくても興味のあるところでしょう。今回はそれぞれの峰が形成された年代について、最近の研究成果（守屋、1984；遠藤、1985；山崎ほか、1986など）を中心に紹介いたします。

大汝峰は 古白山火山の 残骸

大汝峰は御前峰や剣ヶ峰と位置的に近いので、それらと同じ時代に形成されたと考えがちです。表面を薄く覆っている火山噴出物は現在の山頂部からのものですが、大汝峰の本体は古い火山体（古白山火山）の南西斜面をなしていました。古白山火山は地獄谷の上流付近を活動中心としていたもので、現在その中心部はほとんど失われています。

古白山火山の噴出物は、大汝峰のみならず、清浄ヶ原や、白山山頂北東の稜線から大臼川へのびる緩斜面などにも分布しています。これらの噴出物については多くのK-Ar年代が測定されており、11～13万年前の噴出年代が得られています。大汝峰を構成する岩石は直接測定されていませんが、大汝峰が古白山火山の一部をなしていたのですから、11～13万年が大汝峰の年代と考えてよいでしょう。

古白山火山の南西斜面をなしていた大汝峰がいつ頃現在のようになつたかは、古白



大汝峰、手前の池は紺屋ヶ池（御前峰より撮影）

山火山の山体中央部が失われた時期に関係しています。これについては2つの考えが考えられます。1つは河川による経常的な侵食作用によるもので、もう1つは山体の大崩壊によると考えるものです。そのちがいでによって、大汝峰のできる過程や年代も異なったものになり、その解明は今後の課題といえます。しかし、いずれにしても、大汝峰や他の古白山火山の噴出物の形成する地形の特徴や、大汝峰の表面が新白山火山の噴出物に覆われていることから、御前峰や剣ヶ峰よりかなり以前に大汝峰ができていたと考えられます。長い間の侵食が、あの女性的な穏やかな山体を造ったのです。

御前峰の年令は 一つの木片から

御前峰と剣ヶ峰は、現在の山頂を活動中心とする新白山火山の噴出物から形成されています。新白山火山は現在の山頂部を活動中心とする火山で、今から2,3万年前に誕生したと推測されています。御前峰と剣ヶ峰は以前は共に山頂の火口壁を形成していると考えられてきましたが、御前峰から御宝庫にかけての稜線は、東北東に開いた馬蹄形カルデラ壁の一部をなすことが最近の調査によって明らかになっています。この馬蹄形の凹地は、かつて存在した新白山火山の円錐形の成層火山体が、東の方へ向かって大崩壊したためにできたものです。つまり、御前峰から御宝庫へ続く稜線は、その崩壊によってできた滑落崖ともいえるわけです。

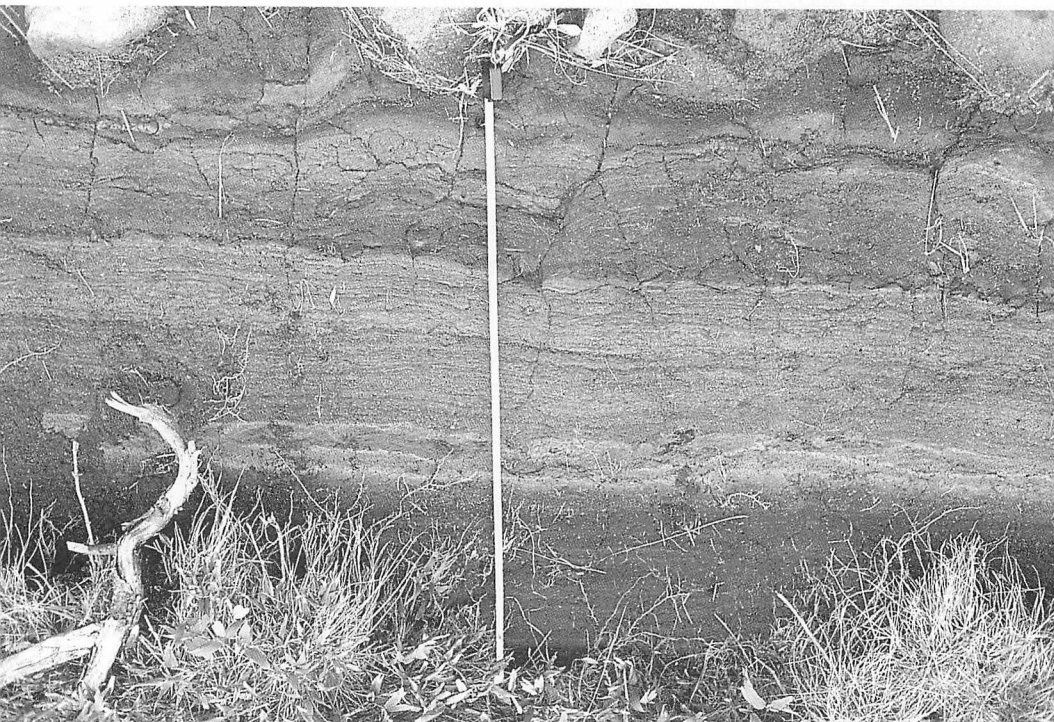
この崩壊の際に東方の大白川へ流出した山頂部の崩壊物が大白川沿いに堆積しています。この堆積物を構成する主なものは新白山火山の山頂をつくっていた安山岩の大小の岩塊ですが、当時成育していた樹木が木片となって埋まっています。この木片のC¹⁴年代が測定され、4,447（±220）年前の年代値が得られています。この場合の年代とは、樹木が白

山の頂上部の崩壊によって埋まった年代で、それはそのまま白山の頂上部の崩壊の起きた時、すなわち御前峰の尾根をつくった時ともいえるわけです。

土壤断面が 鍵をにぎる 剣ヶ峰の年令

剣ヶ峰は上に述べた山頂部の崩壊が起きたのちに、その崩壊跡の凹地に形成された小さな火山体です。白山の三主峰のなかでは、最も険しく荒々しい感じを与えるのは、最も新しい時代にできたからです。この剣ヶ峰を形成した活動は、同時に大白川方面に溶岩を流出しており、活動規模はかなり大きかったと推測されています。剣ヶ峰を形成した火山活動の年代を直接計る方法はありませんが、年代を推定するのに参考になるものはあります。それは土壤に残された白山火山の噴火の記録です。

白山山頂に近い弥陀ヶ原や南竜ヶ馬場などの平坦地には何本かの登山道が通っており、その所々で土壤の断面をみることができます。長い年月の登山者の踏圧と雨水の流水によって、登山道が深く掘り下げられたからです。植物の成育にはよくありませんが、火山の最近の活動を探るには絶好の機会を与えてくれます。土壤の厚さは場所により様々ですが、その断面は普通、白色から淡褐色をした部分と黒っぽい部分とが交互に重なっています。黒っぽい部分は泥炭層と呼ばれ、そこには植物の遺骸が含まれており、火山活動については静穏な時期です。一方、白色から淡褐色をした部分は火山から噴出した火山灰や小さな礫などからなっています。土壤断面1つではそれ程多くの火山灰層をみることはできませんが、多くの場所で観察した土壤の断面を比較対比すると、全部で18の火山灰層が確認されています。これらの火山灰層のうちの1つ（アカホヤ火山灰）は、南九州の鬼界ヶ島付近の海底から噴き出してきたということがわかっていますが、残りは白山火山からのものと考えられています。

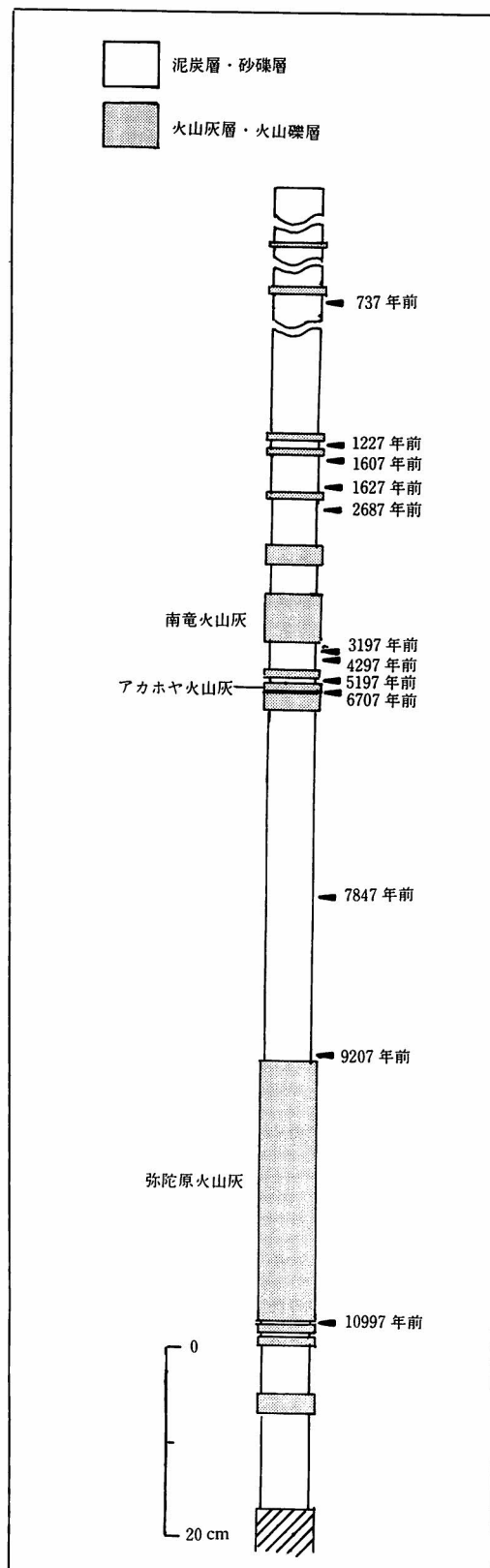


登山道沿いで見られる土壤の断面

剣ヶ峰を形成した活動は溶岩を多量に流出しており、その際に火山灰や火山礫なども同時に噴出していた可能性は大きいと考えられます。火山灰や火山礫などが溶岩の流出と共に、もしくは相前後して噴出したとすると、当然のことながら弥陀ヶ原や南竜ヶ馬場などにもその痕跡が残されています。新白山火山の山頂部の崩壊が起きたのが今から約4,450年前ですから、土壌の断面に確認された火山灰層のうちそれに対応すると考えられるものは、薄いものも含めると10層あります。10層の火山灰層のなかでどれが対応できるかは確定はできませんが、南竜火山灰と名付けられているものは層も厚く、最も可能性の強いものと考えられています。南竜火山灰が降下したのは、2,687年前と3,197年前の間でおよそ2,900年前頃と推定されています。西暦でいえば紀元前10世紀頃で、それ程遠い昔のことではありません。

白山火山は剣ヶ峰を形成した後も、17世紀頃まで断続的に活動していますが、1,659年の活動を最後に、ここ300年程静穏を保っています。しかし、これから先、活動を再開しないという保証はありません。これからも十分な注意が必要と思われます。

(白山自然保護センター)



土壌断面で見られる火山灰層、右の数字は泥炭層のC¹⁴年代、薄い火山灰層は省いてある。(遠藤、1985をもとに作成)

白山麓の くらしと猫



叶内 敦子

白峰村大道谷の作り地のネコ

白山麓の作り小屋の入口の壁には、たいてい猫が出入りするための小さな出入り口が作ってありました。これは「ネコグリ」といわれ、猫が自由に家を出入りするためにあけられたものです。猫は、焼畑で収穫したヒエ、アワなどの穀物や、大切な収入源であった養蚕——カイコ——をネズミの害から守るために飼われていました。

現在では、ネズミをとるため、というよりは愛玩動物として飼われている猫は、昔、焼畑を生業としていた作り地では生活の上から必要であり、またたいへん大切に飼われていました。

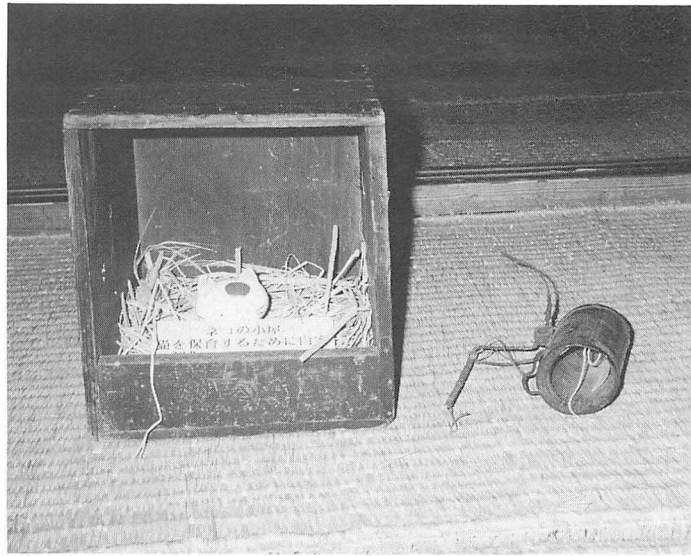
写真は、白山麓の作り小屋で猫を飼う時に使っていた「ネコのコヤ」です。「ネコのコヤ」の中には寒がりの猫のためにボロキレ

やワラのハカマ（ワラの根本のやわらかいサヤの部分）を敷き、家の中心であったイロリのそばに、入口をイロリの方に向けておいてありました。

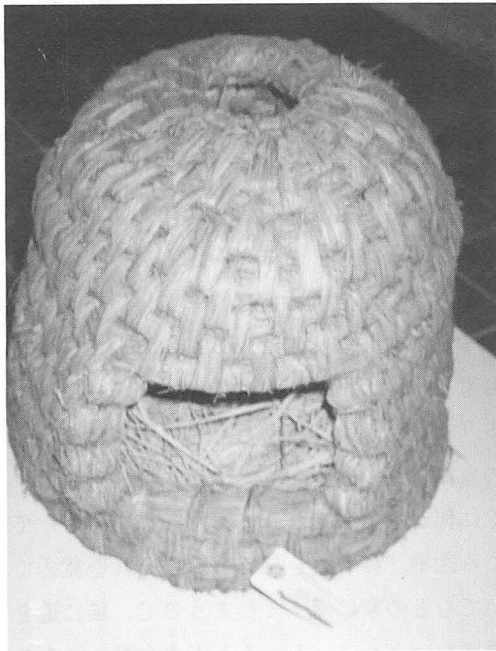
「ネコのコヤ」は、白山麓の白峰村ではこの写真のような木製（スギ板製）のものが普通で、猫を飼う家々で作ったようです。白山麓の村でも平野に近い、鳥越村上野では、ワラをつり鐘型にあみ上げたものが使われていました。写真のワラ製のものは、今はダムの底に沈んだ新丸村小原で使っていたものです。これは、「ネコイズミ」とか「ネコエズミ」と呼ばれ、人間の乳幼児を入れておいたワラ製の保育カゴ「イズミ（イズメ）」の猫用のものと考えてよいでしょう。岐阜県の明方村でも、ほとんど同じ形のワラ製の「ネコイズ



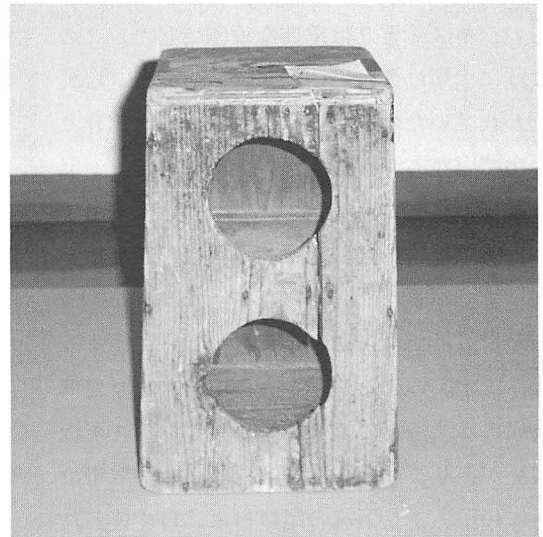
※ネコケグリ (白山ろく民俗資料館)



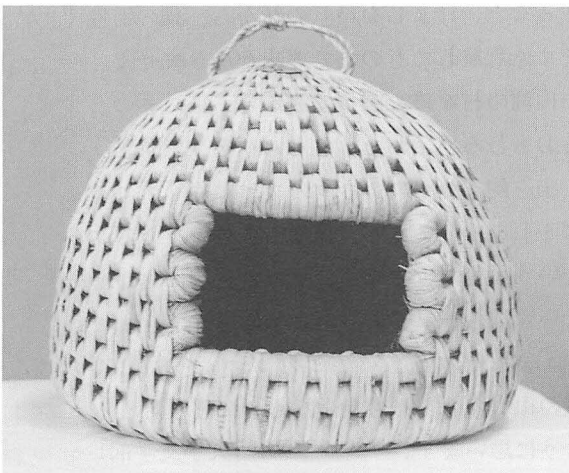
※ネコのコヤ (白山ろく民俗資料館)



※ネコイズミ (新丸村小原)



尾口村東二口のネコツブラ (石川県立歴史博物館)



ネコチグラ (新潟県関川村)



ネコイズミ (岐阜県明方村)

(※金子広幸撮影)

ミ」が使われていました。白山から離れたところでは、新潟県の関川村にも、ワラ製つり鐘型ものがあります。こちらは、「ネコチグラ」と呼ばれています。このような猫専用の飼育用具（「ネコ箱」という場合もあります）は、ひと昔前までは、日本全国の農山村ではごく普通にみられたそうですが、現在ではこの、昔ながらの「ネコイズミ」や「ネコのコヤ」は、すっかり姿を消してしまいました。

焼畑がさかんに行なわれていた頃は、猫は「ネコイズミ」の中で大切に育てられ、家の中心であるイロリ端の特等席を与えられるくらい、ネズミとりは重要な役割でした。このように大切にされていた猫は、どんなふうに飼われていたのでしょうか。白峰から出作りに出ている方から猫の飼い方について、お話を伺いました。

白峰では、一軒の家で飼う猫は一匹だけと決まっていました。一軒で何匹も猫を飼うと、猫がなまけてネズミをとらなくなってしまうそうです。ところが、金沢の石川県立歴史博物館には2階建ての「ネコのコヤ」（スギ板製）がありました。これは白峰から手取川沿いに10kmあまり下流の尾口村東二口で使われていたもので、「ネコツブラ」と呼ばれています。おそらく、親子・夫婦など2匹の猫を飼ったものと考えられますから、一軒で猫一匹というのは、白峰の習慣であったのかもしれない。

白峰では、ネズミをよくとる猫は足の裏が赤い猫で、足の裏の黒い猫はネズミをあまりとらないと言われていました。猫はネズミをとってくると、家の入口（玄関）やイロリ端に並べ、主人に見せました。その時、猫をよくほめてやると、ネズミをたくさんとってきたそうです。

子猫を他家からもらってくる時にも、様々な習慣がありました。関東地方（主に東京？）では、ひと昔前までは「ネコにカツオブシ」といって、子猫を他へあげる時には猫の食べる分としてカツオブシを1本つけました。今でも新聞や雑誌などで子猫のもらい手を捜す時には、「キャットフードをつけます」というものがあるそうです。

白峰での猫のやりとりは、昔は「二文二升」といわれていました。「二文」はお金で、「二升」はアワまたはヒエを二升という意味です。実際には、お金よりもアワやヒエをつけたことの方が多かったようです。アワ・ヒエのかわりにミガキニシン2匹のこともありました。猫は、人間と同じヒエメシをエサにしていますが、もともと肉食動物なので、動物性たん白質の不足を、ネズミをとって食べることで補っていたとも考えられます。

子猫のやりとりには、日本の各地で様々なおもしろい習慣が残されています。白山麓に限りませんが、他家からもらってきた猫がその家に慣れて住みつくように、家に入れてすぐに何かを覆わせたり、また、猫をもらってくる途中、猫が道を見ているとそれを覚えていてもとの家に帰ってしまうので、猫に道を見せないようにいろいろと工夫を凝らしたりするなど、「まじない」の類から、猫の習性をよく理解したもてまで興味が尽きません。白山麓の村々にも調べてみると、猫にまつわるおもしろい話がたくさんありそうです。

猫を飼うための「ネコのコヤ」や「ネコイズミ」をみていると、猫は、ネズミをとる、という役割だけでなく、毎日の生活に欠かせない家族の一員であったように思えてきます。またその猫と、「ネコのコヤ」を通して、昔の山村の暮らしも見近なものに感じられるように思います。（明治大学文学部）

最近のトピックから

白山のシンボルマーク 決定!

白山国立公園指定25周年記念事業の一つとして、白山のシンボルマークを制定しました。シンボルマークのデザインは、白山国立公園が立地する石川・福井・岐阜・富山各県の居住者を対象に公募され、159人の応募者から293点の作品が集まりました。関係者の厳正な審査の結果、最優秀賞には吉田千秋氏（金沢市）、佳作には久保信一（金沢市）・広川昌弘（石川郡野々市町）・前川澄夫（金沢市）の各氏が選ばれました。

シンボルマークの発表は7月18日（土）に白山ろくの白峰村で行なわれました。記念式典の席上ではシンボルマークの除幕式が行なわれ、今後は白山の登山施設や各種パンフレットなどに広く使用されることになりました。



制作者の話から：郷土を代表する山、白山のシンボルマークに自分の作品が採用されてうれしく思います。中学生の時には、犀川のほとりからたまたま白山を仰ぎ見ることができ、そうした少年時代のイメージも参考にしながらデザインを考えました。作品は、雲海に浮かぶ白山と、その代表的な高山植物クロユリ（石川県の郷土の花）を題材として、白山の自然を表現しました（吉田千秋、グラフィックデザイナー）。

白山麓の民具教室 2

伊藤 常次郎

五月下旬に焼畑に蒔いた稗や粟は、八月のお盆頃に穂を出し、九月末には黄色くなって山の斜面が美しい穂波となってきました。ここでは、この期間に野外作業で使われた民具を二種類、紹介いたします。

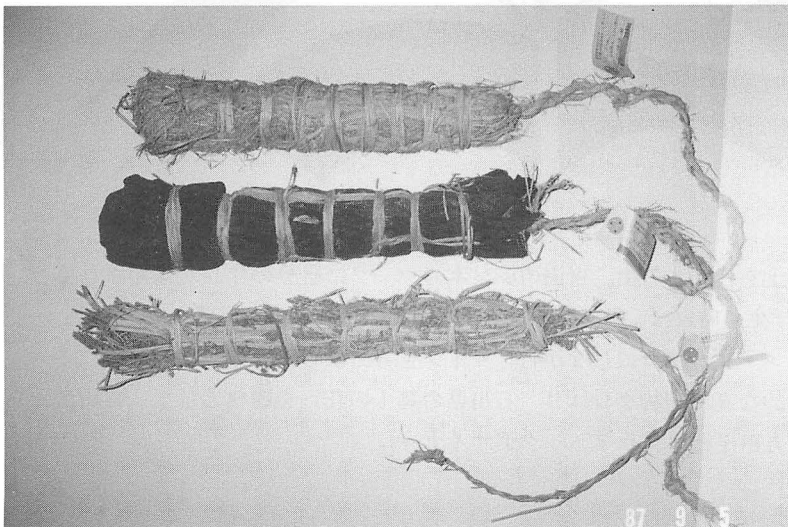
■カビ(ボロカビ、ワラカビ、キガラカビ)

カビとは防虫用具のことを指すものと考えられ、夏に山仕事(雑畑や田の草取りなど)をしたり山道を歩いたりする時には必携でした。夏になって気温が高くなるとカヤアブが大発生し、山で仕事をする人には大敵となりました。特に、ウルル又はオロロと呼ばれる小型のアブは大群となって人を襲い、非常にいやがられていました。そこで、これらの虫を人体に寄せつけないためにカビが使用されました。山仕事や山歩きの際にはカビを腰に吊り下げ、先端部に火をつけて煙を出し、これにより虫を撃退しました。ここではボロカビ、ワラカビ、キガラカビの三種類を紹介します。

ボロカビはその名のとおおり、古着のボロを材料として作られました。ただ、古着からカビに即利用されたわけではなく、色々利用されたあげくの果てにカビに様変わりしました。一例をあげると、最初の着物が破損して着られなくなると、つぎ当て用の古布やフカグツのへり布に使われ、次に雑巾などに利用されそれが使用不能になると、ようやくボロカビ用の布として利用されました。この布を集めて直径5cm、長さ30cmほどの棒状に丸め、表面をワラカスゲで数ヶ所縛り、その余った部分を縄に編んで完成です。

ワラカビの材料はワラです。昔は、冬の間の手仕事としてワラジ作り、縄ない、コモ・ムシロ・ミノ作りなど数多くのワラ細工が行なわれました。この時に多くのワラクズが仕事場に残るので、それを利用してワラカビを作りました。

キガラカビは粟の穂ガラで作られました。粟を脱穀する時にはホガチ白やコバオトシとキネ



上から、ワラカビ、ボロカビ
キガラカビ

やソリバイを使い、よく叩いてからフルイを通して穂ガラと実を選別します。この時フルイの網の目に残ったものが穂ガラで、これを束ねてキガラカビを作りました。

以上の三種類のカビの使用目的と方法は大差ありませんが、使用材料によって同じ白山麓の中でも地域的差異がありました。ボロカビ・キガラカビが手取川本流沿いの白峰村周辺でよく見られたのに対して、ワラカビは同支流大日川沿いの旧・新丸村や鳥越村で多く見られました。後者の地域は稲作地に近いのでワラを入手しやすく、そのためワラカビが多かったと思います。

■ コッペラとガンギ

焼畑で栽培した稗、粟、キビなどは、十月頃収穫されました。この時、一本ずつ穂首を切り取って作物を茹りましたが、それにはコッペラやガンギといった収穫用具が使われました。両者は木や竹でできており、石包丁や鉄製刃物（ホートリガマなど）と並んで農耕文化上も重要な収穫用具だと思えます。

コッペラは、山地に自生する根曲り竹をナタ等で削って、写真の様な形に作り上げたものです。秋の収穫の時には、コッペラを右手に持って刃の部分で稗や粟の穂首に当て、その上から親指で押さえて斜め上方に引き上げ、竹の刃の角部で穂を切り離します。コッペラは白峰方面、特に赤谷地区で多く使われていたことが、調査の結果わかりました。

竹製のコッペラに対して木でできた収穫用具がガンギで、ケヤキの皮を利用して作りました。収穫時にはコッペラと多少異なる使い方をしました。左手で粟や稗の穂を握り、穂首にガンギのV形の刃部を当て、手前の方向引くと同時に、持っている穂を前方に押し出します。ガンギは新丸地区（特に小原周辺）に多く残されていました。

なお、ケヤキの皮以外にも木の小枝でガンギを作ったこともあり、主として子供用に使われました。子供の頃は、秋の収穫期になると山へ行ってアケビの実を取るのが楽しみでしたが、親のほうは稗や粟を一穂でも多く取り入れたいので、その場で木の小枝を使って即製のガンギを作り、子供達に持たせて収穫の手伝いをさせました。おかげで、アケビを食べそこなったことが何度もありました。

（民具研究家）



左から、ガンギ（木の
小枝で作った子供用）、
ガンギ（ケヤキの皮）、
右の2点はコッペラ、
どれも20cm前後

たより

今年の夏は梅雨明けが例年よりもかなり遅く、当地域では8月7日になりました。このため、2年間にわたる白山公園線の災害復旧工事が終わり白山登山者の道路通行が正常な状態になったにもかかわらず、白山山頂部の宿泊施設利用者は昨年に比べて僅かに増加しただけです。

今回は、これまであまり注目されなかった蛇谷のクモについて東勝公氏に紹介していただきました。害虫を食べて人間の益虫となっているクモは、自然生態系の中で欠くことのできない存在となっています。

『白山の三主峰の年令比べ』では、白山を構成する三つの峰の地質年令をK-Ar法やC¹⁴年代測定法により明らかにしたことを中心に紹介しています。同じ白山山頂でも、大汝峰と剣ヶ峰・御前峰では随分形成年代が異なることがわかります。白山に登った際にも、こうした年代の相違を考えながら山を観ると一層面白いと思います。

かつて、白山麓の作り地では、猫が非常に大切にされ、家族の一員として扱われていました。ここでは、猫にかかわる作り地の生活や、猫のための用具について、叶内敦子氏に紹介していただきました。また、前号に引き続いて伊藤常次郎氏に白山麓の民具を紹介していただきました。今回はカヤアブを撃退するカビと、木や竹でできた収穫用具について書いていただきました。

7月26日(日)から28日(火)にかけて、夏の自然観察会『白山登山』を開催しました。梅雨が明けていなかったにもかかわらず、比較的天候に恵まれ、約80人の参加者がありました。今回は初の試みとして、白山ろく少年自然の家と共催で観察会を行いました。また、8月21日(金)から22日(土)に吉野谷村と共催して、当センター中宮展示館前の蛇谷周辺で自然観察会を行いました。夜の川に水中メガネとライトを持って入り、イワナやゴリ(カジカ)を観察しました。

目 次

表紙 白峰村の百合谷珪化直立樹幹	1
蛇谷のクモ	東 勝公 2
白山の三主峰の年令くらべ	東野外志男 6
白山麓のくらしと猫	叶内 敦子 10
白山のシンボルマーク決定	13
白山麓の民具教室 2	伊藤常次郎 14

はくさん 第15巻 第2号(通巻64号)

発行日 1987年9月30日
発行者 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920-23 Tel 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本 確文堂